

異文化理解の重要性

伊藤瑠璃葉 木月桃花 黒木日和子 塩川祐人 藤原麻緒 栗田彩加 辻野亜理沙
指導教員 藤満直樹

1 テーマ設定の理由

現在日本はグローバル化が進んでいる。東京オリンピックの開催もあり、今後はより一層進むだろう。多文化が流入してくる中で私たち日本人はそれらを受け入れ共生の道へと進まなければならない。しかし、今のままで日本はグローバル化に対応できるだろうか。

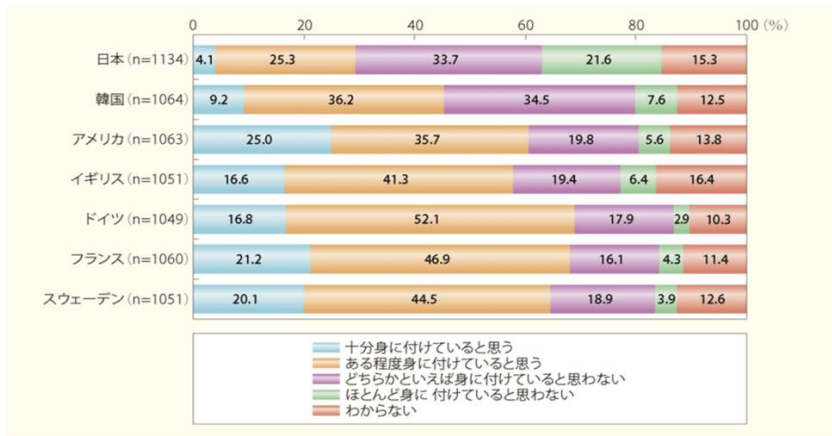
確かに、近年日本の英語教育は進化している。大学入試ではリスニングの配点が高くなったり、英語だけで行う授業が推奨されたりとスピーキングも含めた4技能が重視されている。加えて小学生から英語教育が行われるようになり、英語をマスターすることは必須といってもおかしくない現状にある。だが、英語教育の充実だけでグローバル化、その先の多文化共生を成しえるとは思えない。「グローバル人材」という言葉をよく聞くがそれは単に語学に優れているだけの人材ではないだろう。私たちは語学だけでなく、考え方や心情もグローバル化しなければいけないのだ。つまり、現代社会が求めていることの一つは外国人や異文化を受け入れる一人一人の広い心、すなわち異文化理解の精神である。

この要求は一見簡単そうに見受けられるが、大きな壁が存在する。日本人の国民性だ。一概にそうとは言えないが、日本人は共同体意識を強く持ち、集団行動が得意だといわれている。もちろんこれらはとても大切なことなのだが、時に差別や偏見の引き金となりうるのだ。常識の範囲をとらえ間違えたがゆえに自分たちとは異なるものを異端とみなし攻撃する人も残念ながら存在する。障がい者、LGBTQ、外国人、移民に対する人権問題もこのような背景と少なからず関係しているだろう。この壁を壊すためには、次世代を担う私たち若者が異文化理解に積極的に取り組み、社会全体を巻き込まなければならない。

ここで一つの疑問が浮上する。異文化理解を積極的に行うことがこの課題の解決につながるのかということだ。異文化理解が人権問題を解決する。意味が通じないと思うかも知れない。しかし、単に知識を蓄えることだけが異文化理解ではないのだ。様々な文化と触れ合うことで常識が覆されるとともに自分たちを正当化する心理が薄れる。さらに、文化には歴史や心情が伴う。これらを理解することで、広い視野や柔軟な考えも手に入る。異文化理解を通して身につく力は差別や偏見をなくす上で大いに役立つのである。つまり、若者をはじめとして多くの日本人が異文化理解に取り組めば、人権問題の解決につながり、多文化共生社会を築くことができるのだ。

では現段階でどれほどの若者が異文化理解を意識しているのだろうか。平成30年度におこなわれた内閣府実施の「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」によると異文化理解を実感している若者は全体の約30%しかいないことが報告されている。(以下資料)

資料1 「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」



このことから、日本の若者の意識は他国と比べてもかなり低いことが分かる。この原因として、異文化理解の意味や重要性があいまいであるということがあげられる。言葉自体はよく聞くものの、具体的にどのような行為が異文化理解なのか、どのような利点があるのかははっきりと示されていないのだ。そこで、私たちはより多くの人々に異文化理解を実感してほしいという思いから、異文化理解をテーマに設定して研究を行った。

2 提案

私たちは異文化理解の方法を分かりやすくするためにキーワードを設定した。キーワードは“ICE BREAK”である。このキーワードに設定した理由は、主に二つある。一つ目は英単語の頭文字からとっているということだ。それぞれ I=Interest (興味を持つ)、C=Compare (比較する)、E=Esteem (尊敬する) という意味を込めており、異文化理解の方法を示している。二つ目は、ICE に込められた意味だ。ICE とは一般的に「氷」という意味だが、もう一つ「冷たい態度」という意味も持っている。異文化理解を行うことで、一方的に向けられる冷たい態度を壊したいという願いを込めた。私たちはこのキーワードをもとにアメリカとイギリスの二か国間の文化を比べることにした。理由としては、これから多文化と触れ合う機会が多くなる中で、自国と他国を比べるよりも自国以外の二か国を比べるほうが異文化を理解する力がより高まると思ったからである。では、実際に行った手順を述べる。

一つ目は「Interest=興味を持つ」である。班員で話し合ったところ、アメリカは社会的で愛国家、イギリスは謙虚でマナーを重視するという印象があげられた。異文化を学ぶ上で自分以外の文化に興味を持つことは必須だ。相手の文化を想像し、心情や背景も読み解こうとする姿勢が大切である。また、実際に文化を学んだとき、自分の想像と違っても決して嫌悪感をもってはならない。あくまでも興味をもつということを前提に想像してほしい。

二つ目は「Compare=比較する」である。私たちは、言語、生活、スポーツ、恋愛、ジョークの5つの観点から二か国を比較した。

2-1 言語について

最初に話者の数を比較する。アメリカの人口は2億6千万人で、イギリスの人口は6千万人である。それぞれの英語を話す国も考慮せねばいけないが、世界の英語話者が約3.9億人であることを踏まえると、話者の数はアメリカ英語の方が多いとわかる。

では、国の数はどうだろうか。アメリカ英語を話す国は、アメリカ、カナダなどで、イギリス英語を話す国は、イギリス、シンガポールなどの国だ。一見アメリカ英語を話す国が多いように思えるが、実はイギリス英語の方が、多くの国で用いられているのだ。理由として、イギリスの植民地の歴史が挙げられる。イギリスはかつてシンガポール、オーストラリアなど約50もの植民地を持っていたため、イギリス英語を公用語とする国が多いのだ。このことから、アメリカとイギリスの歴史や人口が現在の英語の在り方に関わっていることがわかる。

次に、文法や単語、発音における違いを比較する。まずは、文法について説明する。アメリカでは“Have=持っている”だが、イギリスでは“Have got=持っている”と意味することがあるのだ。例文を上げると、アメリカでは“I have a book.”イギリスでは“I have got a book.”となる。では単語について説明する。飴を英語に訳したいとき、アメリカでは“candy”となるがイギリスでは“sweet”と訳す。また、Bird という単語は一般的に“鳥”と訳されるが、イギリスでは“彼女、妻”という意味ももつ。さらに“color (色)”というスペルがイギリスでは“colour”と表記される。発音やアクセントにおいてもアメリカではLやRを強く発音するのに対し、イギリスではTを強く発音する。このように同じ英語でも、アメリカ英語とイギリス英語では大きな違いがあると分かる。

2-2 生活について

まず性格の違いについて説明する。アメリカ人は積極的に自己アピールをしたり初対面の人にもフレンドリーに話しかけたりする。一方、イギリス人は日本人と近いところがあり、個人のプライバシーを大切にしたり、気配りが得意だったりする。もちろん個人差はあるが、大まかな違いとしては以上である。

次に、お酒の規制について説明する。日本はお酒を飲めるのは20歳からだ決められているが、アメリカでは21歳から、イギリスでは18歳からとアメリカの方がお酒に関する規制が厳しいことが分かる。

公衆トイレについても違いがみられる。アメリカはドアの下の方に足元が見えるほどの隙間がある。これはトイレでの犯罪の防止のための策だそうだ。イギリスは公衆トイレが有料であり、入り口にはお金を払わなければ中に入れずストッパーがついている。

最後にチップ制度について述べる。チップを渡す機会はアメリカの方がはるかに多い。アメリカでは、給料が少ない分、チップが重要な収入源になるのだ。イギリスはあまりチップを渡す機会がなく、客によって変わるそうだ。

このようにアメリカとイギリスでは、性格だけでなく、日常生活においても違いがみられることが分かった。

2-3 スポーツについて

アメリカでは部活動にシーズン制を設けている。そのため自由度が高く、州によって様々な部活が行われている。イギリスでは部活は放課後活動として行われるため、時期によって活動は変化する。どちらも日本のような部活ではなく、スポーツを楽しむ活動という印象だ。

2-4 恋愛について

私たちはイギリスとアメリカの恋愛文化の違いについて調べるため、イギリス人の代表としてユーリ先生、アメリカ人の代表としてアメリカのある高校生 3 人に次の 5 つの質問をした。

- 1) 付き合う前にキスをするのは普通か
- 2) (イギリス or アメリカ人)男性の **You are beautiful.**は信じてよいか
- 3) 人前で愛情表現をするのは普通か
- 4) 何をしたら浮気になるのか
- 5) 告白をするか

両国の結果は下記の通りだ

	イギリス	アメリカ
1	普通、キスも相手を決めるために重要	相手によって変わるが、付き合う前にキスをするのは多くの場合普通
2	イギリス人男性がそれを言う場合は何か頼み事がある時、普段は「君は花のようだ」のように遠回しに伝える	本心
3	普通だがアメリカほどではない	人前で手を繋いだりキスをしたりするのは普通だと思う人が多い
4	交際相手が知った上で 2 人きりだけで会うのは良い、キスは浮気	告白、キス、性行為をしたら確実に浮気
5	はっきりと告白をする文化はない	殆どの場合男性から女性に告白をする

結果の表を見てもわかるように似たように見えるイギリスとアメリカの間にも恋愛においてもこれほどの差があることがわかった。両国の異文化について学ぶためにそれぞれの国の恋愛映画を見ると言うのも 1 つの方法かもしれない。

2-5 ジョークについて

私たちにとって、アメリカとイギリスのジョークの違いはあまりないように思われる。そこで私たちは実際にイギリス人であるユーリ先生にインタビューを行った。いくつかのアメリカンジョーク、ブリティッシュジョークの例文を見せ、一番面白かったものとそうでなかったものを選んでもらい、理由を述べてもらった。一番面白いと答えたジョークは日本では問題になってしまうようないわゆるブラックジョークであった。簡単にいえば家庭の複雑な事情である。一方、一番面白くなかったと答えたジョークはどれも平和的で、ちょっとした言葉遊びのようなものだった。ユーリ先生によると、アメリカンジョークはエネルギーでブリティッシュジョークはドライな印象だという。確かにアメリカのコメディードラマは声を張ったり、大きな身振りをしたりすることで笑いが起き、ユーリ先生の選んだジョークはドライという言葉が適切のように感じる。ユーリ先生の意見だけでジョークの違いを決めつけることはできないかもしれないが、実際の声聞くことで、最初に分からなかったことがわかり、自分のなかで新たな価値観が生まれることもあるだろう。

このように具体的に二か国の違いを比較することで新たな知識だけでなく、それぞれの違いと共通点を認める力が身につくのではないだろうか。

三つ目は「Esteem=尊重する」である。アメリカとイギリスの違いを調べていく中で、想像とは異なる事実に驚くこともあったが、どれも興味深く、私たち自身楽しみながら研究を行った。異文化理解を行う時、自分とは正反対の文化とも出会うだろう。それらをすべて受け入れて実践することは難しいかもしれない。しかし、一つの文化として存在を認め、尊重することはできる。自分たちを正当化せず、異なった考えや意見にも耳を傾けることが大切だ。

3 結論

私たちは異文化理解を実現するために、ICE BREAKER の考えをもとにアメリカとイギリスを比較してきた。調査の結果、一見同じに見える英語圏だが、それぞれ特有の文化や歴史があり、今日における思考や生活習慣につながっていると学んだ。異文化理解を行う上で、相手のことに興味を示し、違いを比べ、それを尊重するという一連の方法は知識の貯蔵だけでなく、心情や背景を深く理解するうえで非常に有効なことなのだ。これは日本人が必要とする能力を養うだろう。

未知の事柄と出会ったとき、その恐怖から自身を守ろうと相手を傷つけることは心理学的にもありうるとされているが、対象物をしっかりと認識し、危険ではないと判断すれば、こうした問題は解決できる。真の異文化理解を実現するためには先入観にとらわれず自ら物事を理解しようとする一人一人の意識こそが大切なのだ。私たちは、こうした意識が課題を解決し、自ずと多文化共生社会に導いてくれると期待している。

4 今後の課題

ここまで異文化理解の重要性と方法を私たちに研究してきた。それをふまえて今後の課題を2つ述べる。

1つ目は、異文化理解を行うことで全員が人権問題を解決できるほどの能力が得られるのかということだ。いくら学ぶことだけが異文化ではないといっても、受け取り方や感じ方は人それぞれである。異文化と接したからといって必ずしも寛大な心が手に入るとは言えない。異文化理解の大まかな方法だけでなく、具体的な取り組みを示していく必要がある。

2つ目は、この考えをどのように広めていくかということだ。考えをただ押し付けるだけでは意味がない。心から共感し、意識を変えようとしてもらうために、私たちにできることは何か考えていきたい。

5 出典

<https://mysuki.jp/difference-american-english-4798>

<https://www.d-side.jp.com/ryugaku-post/2016/07/16/bukatsu/>